

## 微生物と人の間(2)

微生物が自由と安定を秤にかけて、安定を選択した結果多細胞生物が生まれたとすれば、多細胞生物への変化は進化でなく選択です。事実単細胞生物は自主的な行動は殆どできず、唯その環境に従うだけです。それに較べ多細胞生物は食糧獲得に能動的になれるし、危険の回避も可能であり、分化により鎧も着られる、また寿命も多細胞は単細胞と比較にならないくらい永くなります。唯、自由は放棄せねばなりません。微生物が多細胞を選択したとして何の不思議もありません。そして元来微生物は情報の授受とその適応は手馴れたものです。細胞膜には種々の情報受信用の蛋白質が顔をだしており、絶えず情報を受信して適宜に処理をしています。又細胞が必要とするものを発信します。従ってちょっと工夫すればそれぞれが受持ちを分担して多細胞化する素地は充分に持っています。

多細胞生物同士の競争の結果、機能の高度化の必要から分化するための進化は当然必要です。然しこれは細胞が生きるための進化とは次元が違います。生きるための蛋白質は絶えず発現しなければなりません、分化のための蛋白質は、種類は多くてもその頻度は極めて少ないです。そう考えれば我々の細胞と微生物は生存という意味では殆ど同種であり、同レベルだと考えられます。これは非常に大胆な発想ですが、こう考えると酵母と人との蛋白質の共通性がよく理解できます。我々の先祖はこれに気付いたのです。しかも私のように理屈を捏ね回すのではなく、味覚という利器です。すごいではありませんか。

事実、病原菌を殺す薬はおおむね蛋白質を変形させるのですが、菌に害を与えようとするれば人にも害があり、それを避けるのが製薬のネックになっています。またそのために副作用が避けられないのです。微生物と我々はそれ程似ているのが現実です。

機能の分化はホルモンによっている事が解っています。情報の伝達物質をホルモンといいます。細胞はホルモンの濃度傾向で全体のなかの自分の位置を判断しているそうです。そしてDNAの判断により必要な蛋白質を作って所定の性質に転化していきます。こうして多細胞生物が進化してきたと考えられます。そして必要な器官の調整・活用等自在に全体をコントロールしているのもホルモンです。高等な生物になるほどその機能調整は気の遠くなる程複雑多岐になってきます。その進化の頂点に我々がいるのです。

ところで私には自分が60兆個の微生物の集合体であるという意識はありません。読書の皆さんもそうでしょう。紛れも無く私は1個の生命体であり、分割は絶対受け入れられません。この辺はどうなっているのでしょうか。それが納得できなければわたしが60兆個の微生物の塊であるというようなことは納得できません。皆さんもそうでしょう。